



Title	日本型自助組織「断酒会」の誕生とその役割
Author(s)	眞崎, 睦子
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 119, 167-176
Issue Date	2013-12-25
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.119.167
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53827
Type	departmental bulletin paper
File Information	AA12219452_119_08.pdf



日本型自助組織「断酒会」の誕生とその役割

眞 崎 睦 子 *

【目次】

はじめに

1. 自助組織とは何か
2. 断酒会の誕生と AA (Alcoholics Anonymous)
3. 断酒例会とは何か
4. 断酒会による社会貢献活動

結語—断酒会の今後

【キーワード】 断酒会, 自助組織, 社会集団, アルコール依存症, 社会的学習

はじめに

2002年に開始した筆者による調査「飲酒に関する大学生の意識調査」において、2013年に至るまで、毎年90%以上の回答者が「聞いたことがない」とする自助組織¹がある。断酒会である。回答者である大学生は、断酒会だけではなく、自助組織そのものの概念についても、「経験上わからない」とするものも少なくない。自助組織、そして、日本で生まれた自助組織、断酒会とはなんだろうか。本稿では、「社会学」「教育学」モデルとしての自助組織の概念を捉えることから始め、断酒会を日本型自助組織と位置付け、その設立の経緯、また活動内容と役割について概観する。

1. 自助組織とは何か

本稿でいう自助組織(自助グループ, self-help group)とは、共通の問題を抱える個人及びその家族らが、自らの意思で参加し、対等な関係のもとでのコミュニケーションにより、問題の解決あるいは緩和をはかる団体である。1930年代にアメリカのアルコール依存症者の間で始まり、欧米を中心に様々な問題を抱える当事者たちの間で形成されるようになった。この始まりの時期がアメリカにおける禁酒法の時代の終焉とともにあることは興味深い。この後、医療の分野では、特に精神科のアルコール病棟での治療については、「開放病棟」での期限付き教育入

* 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授

院プログラムが主流となった。アルコール依存症者らを物理的にアルコールに手の届かない環境におくことから、アルコールが入手できるような環境に移っても自身の行動を制御できるような学習を繰り返すという治療内容に変容を遂げたことも社会全体における禁酒政策の失敗と無縁ではないと筆者は考える。

さて、問題を抱える当事者、つまり、治療を求めるアルコール依存症者により始められたことで、自助組織を、医師・臨床心理士・カウンセラー・ソーシャルワーカー・看護師といった医療に携わる、あるいは医療周辺の専門職の領域を補完する補助的な団体とみる向きもあるが²、本稿では、そのようなとらえ方に敬意を表しつつ、自助組織を医療からは独立した社会集団としてとらえる。しかし、日本社会においては、自助組織につながる人々に自助組織の存在を知らしめ、参加の動機付けを行う初期のエージェント(媒体)は多くの場合、医療関係者や地域の保健活動の担い手であることにも留意したい(資料1)。

(資料1) Survey at the 47th Shikoku region convention of *Danshukai* (Masaki 2012)

Who gave you the information about *Danshukai* and encouraged you to attend?

<*Danshukai* (alcoholics)>

	Medical professional	Public health center	<i>Danshukai</i> members	family	other	non-response
number	117	4	20	14	13	2
%	68.8%	2.4%	11.8%	8.2%	7.6%	1.2%

<*Danshukai*(family)>

number	37	9	9	8	5	28
%	38.5%	9.4%	9.4%	8.3%	5.2%	29.2%

Who kept encouraging you to attend *Danshukai* strongly?

<*Danshukai* (alcoholics)>

	Medical professional	Public health center	<i>Danshukai</i> members	family	other	non-response
number	83	2	39	36	16	4
%	46.1%	1.2%	22.9%	21.2%	9.4%	2.4%

<*Danshukai* (family)>

number	27	3	26	9	7	31
%	26.2%	3.1%	27.1%	9.4%	7.3%	32.3%

(資料1) Survey at the 47th Shikoku region convention of *Danshukai* は、筆者が2012年4月に実施した無記名アンケート(第47回 全日本断酒連盟 四国ブロック(香川) 大会, サンポートホール高松 2012年4月22日, 回答者数287)をもとに作成し、2012年6月に発表資料として用いたものである(MASAKI, M. “What Is *Danshukai*? On ‘Japanese Alcoholics Not Anonymous’”, Diversity Conference, June, 2012, The University of British Columbia, Canada)。この資料から断酒会の情報をアルコール依存症者に与えたのは約7割が医療従事者であることがわかる。同時に断酒会につながることを継続的にすすめることに大きな役割を果たしたのは断酒会員であることが確認できる。

日本型の自助組織として誕生し、それに続いて日本社会に誕生した様々な自助組織のひな型ともされてきたアルコール依存症者とその家族からなる社会集団、「断酒会」の設立の経緯は以下の通りである。

2. 断酒会の誕生とAA (Alcoholics Anonymous)

日本型自助組織「断酒会」の誕生は、欧米諸国の様々な自助組織に影響を与えたAA、すなわち、Alcoholics Anonymousの存在抜きには語ることができない。筆者は断酒会を日本型の自助組織ではあるが、AAの派生グループの一つであると位置付ける。AAとは、“Alcoholics Anonymous”の略であり、日本語では「アルコールリクス・アノニマス(無名のアルコール依存症者たち)」とされている³。公式ホームページでは、以下のように説明されている⁴。

アルコールリクス・アノニマスは経験と力と希望を分かち合って共通する問題を解決し手助けしたいという共同体である。AAのメンバーになるために必要なことはただ一つ、飲酒をやめたいという願いだけである。会費もないし、料金を払う必要もない。私たちは自分たちの献金だけで自立している。AAはどのような宗教、宗派、政党、組織、団体にも縛られていない。また、どのような論争や運動にも参加せず、支持も反対もしない。私たちの本来の目的は、飲まないで生きていくことであり、ほかのアルコールリクスも飲まない生き方を達成するように手助けすることである。

2002年から始めた筆者による調査では「AAについて聞いたことがある」と答える学生も常に10%未満であるが、AAが誕生した地、アメリカでは、多くがこの団体の始まり、すなわち、ビルとボブという二人のアルコール依存症者らの出会いについて知っているという。医学、心理学等の専門家や指導者不在の、つまり当事者同士の定期的な集まりが、アルコール依存症からの回復に一定の効果を示したことから、そのスタイルが全米に留まらず、ヨーロッパ諸国へも広がりを見せた。

AA—この自助組織の特徴の一つはその名が示すように“Anonymous”—参加者が姓名を名のらないことにある。しかし「無名の」という表現は事実には即したものではない。実際には参加者はニックネーム等を名のっている。実際には姓名のうち、「名」のみを名のる場合あり、姓名とは無関係のAAネームを名のるものあり、と、その「無名」の解釈は個々の参加者に委ねられている。一方、公的な場に顔を出さない、実名を出さないというポリシーは固く守られており、これは参加者のプライバシーを厳守するとともに、一部の特別な「個」の創出を防ぐ、すなわち、参加者間が同等でなくなることを防ぐためでもある。

AA、断酒会はともに「宗教団体ではない」と明言しており、「教義」という表現の使用は相応しくないが、AAは「12のステップ」「12の伝統」を、断酒会は「断酒新生指針」「断酒会規範」を、その活動の理念としている。ここで「断酒新生指針」と「断酒会規範」をAAの12のステップと12の伝統と比較しながら眺めてみよう(資料2)(資料3)。

(資料2) 「断酒会新生指針」と「AA 12のステップ(略言)」⁵⁾

「断酒会新生指針」 番号 (1～7)	「断酒会新生指針」	AA 12のステップより (筆者による略言)
1	酒に対して無力であり、自分ひとりの力だけではどうにもならなかったことを認める	1. アルコールに対して無力であることを認める
2	断酒例会に出席し自分を率直に語る	4. 徹底して自身の行動を整理し、「心の棚卸し」を行う
3	酒害体験を掘り起こし、過去の過ちを素直に認める。また、仲間たちの話を謙虚に聞き自己洞察を深める	5. 自身のありのままの姿を認める 10. 4. の「心の棚卸し」を続行し、検証する
4	お互いの人格の触れ合い、心の結びつきが断酒を可能にすることを認め、仲間たちとの信頼を深める	
5	自分を改革する努力をし、新しい人生を創る	
6	家族はもとより、迷惑をかけた人たちに償いをする	8. 自身が傷つけたすべてのものへの償いの準備を行う 9. 8. で述べた人々に機会ある毎に償う
7	断酒の欲びを酒害に悩む人たちに伝える	12. 他の当事者らにこれら(1～11)を伝え、これらの実践のための努力を続けていく

(資料3) 「断酒会規範」と「AA 12の伝統(略言)」

「断酒会規範」 番号 (1～10)	「断酒会規範」	AA 12の伝統より (筆者による略言)
1	断酒会は酒害者による酒害者のための自助集団である	5. AAの各グループは問題を抱えている依存症者にメッセージを伝えることを目的とした共同体である
2	断酒会には酒をやめたい人なら誰でも入会できる	3. 飲まずに生きることを願う数名が集まれば、他の団体に加入しない限り、AAグループの一つと名づけることができる
3	断酒会員は姓名を名乗ることを原則とする	11. 匿名性重視、特にAAメンバーとしての個人情報情報をメディアにのせることはない 12. 匿名性重視
4	断酒会員としての活動は、原則として無償である	8. AA12番目のステップに関する活動は常に無償でなければならない
5	断酒例会はあらゆる条件を超えて平等であり、支配者はいない	2. 最高の権威はコミュニティの良心の中に現れる神のみ 9. AAには実務担当者がいるが、彼らはその肩書によって権力を得ることがなく、支配もしない
6	断酒例会は体験談に終始する	
7	断酒例会は家族の出席を重視する	
8	断酒会は酒害相談はもとより、啓発活動を通して社会に貢献する	
9	断酒会は会費によって運営される。但し補助金、善意の寄付金等は受けることができる	7. AAは自発的な献金で運営される。何らかの義務が生じるような寄付も受けない
10	断酒会は政治・宗教・商業活動に利用されない	10. メンバーはAAの一員として外部の論争に意見を述べない。政治や禁酒運動、宗教的な論争に関与しない

(資料2) 及び (資料3) では、断酒会の理念を左におき、右側にはAAの理念からの引用(筆者による略言)をおいた。AAの理念に呼応するような断酒会の理念が複数確認できる。このよう

にいずれの資料からもAAの理念を土台に断酒会の基盤がつくられたことがわかる。ただし、宗教とは無縁といいながら、キリスト教の影響を色濃く受けたアメリカ社会で生まれたAAの宗教的とも思われる表現やスタイルからこれを取り除くために苦慮したあとがみえる。具体的には、「霊的な」「より大きな力（ハイヤーパワー）」などの一般に日本の行政用語には現れることがない表現が取り除かれており、AAでは献金制であるが、断酒会は会費制である。献金とはいわゆる政治献金のようなものではなく、一般にキリスト教の多くの宗派で行われている個人の良心に基づく献金のスタイルを指すといっていいただろう。一例をあげると礼拝の場に、中身がみえないように、あるいは硬貨や紙幣の区別がつかないように配慮された袋や容器が回され、信者あるいは出席者が思い思いの額の献金を行う。AAでいう献金とはこのような献金である⁷。このような献金のスタイルは日本では一般的であるとはいえない。断酒会の会費は、公益法人全日本断酒連盟の会費が年間3,600円、別途、各地域断酒会の会費が加わる（額は地域によってばらつきがある）⁶。また、先述した、AAの匿名性、無名性のポリシーのもと、ニックネームやAAネームで呼び合うことは、導入されず、これが⁸、日本の断酒会が日本型であると特徴付けられるルールとなった。但し、これは強制されておらず、各地の断酒会の機関誌等にも「匿名」での投稿や姓名のイニシャル文字が散見する。

このようにAAの多大な影響を受け、また日本社会に広く受容され得る諸々の指針等を整備したうえで断酒会—正式には全日本断酒連盟は、それまで日本各地に誕生しては大きな広がりを見せることがないままとなった「禁酒運動」の挫折の後、1953年（昭和28年）⁸に東京で発足した「断酒友の会」と1958年（昭和33年）に高知県で発足した「高知断酒新生会」の二つの流れが合流した結果、1963年（昭和38年）に誕生した⁹。2011年（平成23年）4月には公益社団法人の認定を受けている。

3. 断酒例会とは何か

断酒会の活動の根幹をなすのは「例会」である。「断酒会新生指針」にもあげられているように、「断酒例会に出席し自分を率直に語る」ことである。断酒会では、「一日断酒」「例会出席」という表現が多用されるが、断酒会の活動は、まず、この「例会出席」の積み重ねのうちに、「一日断酒」を繰り返すことを礎としている。断酒例会での語りは、「体験談」と呼ばれ、「言いつぱなし・聴きっぱなし」が原則である。このルールのもと、体験談の語り手に対してのコメントやアドバイスも原則禁止である。体験談に相槌が打たれることもなければ、批判されることもない。この「言いつぱなし・聴きっぱなし」のコミュニケーションは対等な関係のもとに行われる。司会者や世話係に相当する役職についているものはいるが、例会の間では「平等であること」が貫かれている。具体的には参加者の語りの時間は例会の時間内に参加者全員がその語りを終わることができるように配慮されている。そして参加者には「例会場で話されたことは、例会場に置いていく」という守秘義務が課される。

これがどのように、1930年代はじめまで医学や心理学の専門家からさじを投げられたアルコール依存症という問題を抱える参加者の回復に役だっているのだろうか。

筆者は断酒例会を社会的学習—観察学習の場であるととらえる。1950年代にバンデュラ

(Bandura, A)が提唱した、他者の行動の観察によって学習が成り立つとした、いわゆるモデリングによる学習の場である。断酒例会の参加者は無意識のうちにこのような学習を繰り返している。例会という学習の場で多くのモデルを観察することによって自身の内的動機のみならず、絶えず新たな行動規範やそれに伴う回復に向けての動機を得ていくのである。バンデューラは「失敗による損失と危険が大きければ大きいほど観察学習の重みは大」と説くが、断酒例会ではまさにこの飲酒に起因する失敗と損失がその体験談の中で語られるのである。例会出席者は、他者の体験の中に自身の行動の方向性を見出すのである。断酒会はこうした理論を知らずして相互的な社会的学習を実践している社会集団であるといえよう。このような学習スタイルは「個」では困難であり、集団の場、つまり例会出席がなければあり得ない。例会ではその語りの数だけ観察の対象、モデルが存在するのである。

しかしながら、断酒例会の出席者は断酒のレベル一つをとっても、「まだ断酒をする気にならないが家族や医師のすすめで仕方なく出ている」ものから、30年の断酒を実現しているものまで、多様である。また、断酒の実現をしているものの中にも、「断酒新生指針」や「断酒規範」を体現したようなものから、自身の身体的健康のための断酒には成功したが、それ以外の社会規範からは大きく外れるものなど、様々なモデルが存在する。このように多様なモデルから自身のモデルとすべき行動を選択することは参加者の観察に委ねられる。そしてこの観察学習の結果、会を離れるものもいる。また、会に参加し続けた全員が観察学習の成果が得られるとは限らない。このような断酒会における観察学習のあり方の詳細に関しては稿を改めたい。

4. 断酒会による社会貢献活動

以上、述べてきたような例会重視の断酒会が力を入れているのが、当事者ならでは社会貢献活動である。断酒会はその定款(公益法人全日本断酒連盟定款)の第2章目的及び事業、第3条「目的」を以下のように明らかにしている。

この法人は、酒害に関する社会啓発と地域の断酒組織の結成を促す等の事業を行い、酒害の及ぼす社会悪の防止と広く社会福祉に寄与することを目的とする。

筆者自身も北海道大学において「社会問題としての飲酒」(主題別科目「社会の認識」)を講義科目とする授業を担当し、学期中にNPO法人札幌連合断酒会有志にゲストスピーカーとしておいでいただくなど、この社会貢献活動の恩恵を受ける一人である¹⁰。断酒会では、未成年飲酒防止から飲酒運転根絶まで、様々な酒害啓発を目的とする冊子の刊行や市民セミナーの開催、街頭活動などを行っているが、現在、特に力を注いでいるのが、アルコール問題を抱える女性に対する広報、高齢の会員のための居場所づくり、自殺予防に対する啓発であると思われる。

(資料4) *Ages, Gender, and Length of Sobriety of AA and Danshukai*は、筆者が2012年6月に発表資料として用いたものであるが、断酒会では60歳を超えるものが会員の半数以上をしめていることがわかる。これに対してAAでは60歳以上のメンバーは2割に満たない。日本における

断酒例会の多くが、会社帰りに参加可能な時間帯にもたれているが、現在は高齢の会員が参加しやすい時間帯(午後の比較的早い時間帯)に高齢者のための会を設けるなどの動きが広がっており、これは日本特有の動きである¹¹⁾。もう一点、特筆すべきはその男女比の違いである。AAのメンバーの約3割が女性であるのに対して、断酒会の女性会員は全体の1割にも達していない。断酒会では女性会員を「アメシスト」と呼び、通常の断酒例会に加えて、女性のための集いの場を設けるなど、女性が参加しやすい環境を整え始めている。このいずれの問題についても、社会貢献活動を行うと同時に、女性、高齢者を含む社会全体に断酒会そのものの知名度及び認知度を高めていくことが肝要である。現在の日本社会においては、断酒会の情報が十分にいきわたっているとは言い難く、断酒会による社会貢献活動を受けとめる側の準備すらできていないのである。

さて、急務とされているのが、自殺予防関連の活動である。近年様々な調査によってアルコール依存と自殺の関連が紹介されるようになったが、それでも自殺の原因として「うつ病」や「喪失感」が表に出てくることがあっても、アルコール依存の問題がストレートに語られることはあまりない。日本と同じように、数字の上ではそれ以上に、自殺が大きな社会問題となっている韓国では次のようなデータが紹介された¹²⁾。「自殺が急増したのは、うつ病などの精神疾患が急増したことと関連がある。自殺を図った人の75.3%は、1種類以上の精神疾患にかかった経験があった。男性はアルコール依存症(50.7%)、女性はうつ病などの気分障害(49.6%)やパニック障害などの不安障害(42.6%)を患った人が多かった」というものである。人口10万人あたりの自殺者数がOECD加盟国では最も高いとされる韓国のデータは日本社会でも広く受けとめられるべきである。しかしながら、自殺対策はほとんどの自治体が取り組んでいるものの、そこに断酒会の活用をうたう自治体はほんの一部である。

(資料4) Ages, Gender, and Length of Sobriety of AA and *Danshukai*

Ages of Members

<Age>	Under 21	21-30	31-40	41-50	51-60	61-70	Over 70
AA	2.3%	11.3%	16.5%	28.5%	23.8%	12.3%	5.3%
<Age>	Under 20	20s	30s	40s	50s	60s	Over 70
<i>Danshukai</i>	0	0.5%	4.6%	14.1%	24.5%	34.7%	21.5%

Gender of Members (2007)

<Gender>	Men	Women
AA	67%	33%
<i>Danshukai</i>	91.8%	8.2%

Length of Sobriety

(years)	More than 10	Between 5-10	Between 1-5	Less than 1
AA	33.3%	12%	24%	31%
<i>Danshukai</i>	33.7%	18.4%	30.2%	17.7%

Alcoholics Anonymous 2007 Membership Survey (<http://www.aa.org/>)
Yakushin suru Zendanren 2012

(資料4) Ages, Gender, and Length of Sobriety of AA and *Danshukai*は、筆者が上記文献を参考に作成、2012年6月に発表資料として作成し用いたものである(MASAKI, M. “What Is *Danshukai*? On ‘Japanese Alcoholics Not Anonymous’”, Diversity Conference, June, 2012, The University of British Columbia, Canada)。AAのデータは北米(アメリカ・カナダ)のものであるが、2011年のデータでは男女比が男性65%、女性35%と女性の割合は年々微増している。

結語—断酒会の今後

さて、本稿では、日本型自助組織「断酒会」の設立からその活動内容、役割までを概観するに留めた。断酒会—公益社団法人全日本断酒連盟は今年50周年を迎えた。断酒会の結成を祝う全国大会が毎年日本各地で行われているが、その大会には全国から3,000人規模の会員と家族が参集する¹³。多いときは5,000人を超える。この数字を紹介すると人数の多さに驚かれることが多いが、断酒会会員数は年々減少傾向にある。一時は2万人を超える団体であったが今では1万に届かない¹⁴。これは大学生を対象にしているとはいえ、筆者の調査結果「断酒会について聞いたことがある」と答えるものが1割を超えたことがないことと無縁ではない。断酒会ではアルコール依存症者を「酒害者」と呼ぶ。断酒会につながる人の数が減少しているとはいえ、「酒害者」が減少していることにはつながらない。また、飲酒という人間の行為によっておこる問題を「酒害」とするなら、酒害が社会にあふれていることはいうまでもない。もっとも大きな問題の一つは、飲酒関連問題を「問題として論じることすら歓迎しない」「飲酒による社会の損失から目をそむける」という社会の風潮かもしれない。皮肉にも断酒会がその目的でうたっている社会啓発は、一部の例外を除いて、その「社会」によって遮断されているのが現状である¹⁵。設立から50年が経過した今でも「社会資源」と認識されていないのである。

アルコール依存症に対する無知や偏見が断酒会による社会貢献活動の意志を社会から遠ざけてきたことも社会全体で再考すべきときがきている。

本稿は科学研究費補助金(基盤C・課題番号24530595)の助成を受けて行う研究成果の一部である。

主要参考文献

- 岡本勝(1996)『禁酒法 「酒のない社会」の実験』, 講談社現代新書
- 葛西賢太(2007)『断酒が作り出す共同性 アルコール依存からの回復を信じる人々』, 世界思想社
- 公益社団法人全日本断酒連盟(2012)『躍進する全断連—2012年版』, 公益社団法人全日本断酒連盟
- 田中孝雄 編(1988)『アルコール症』, 同朋舎
- なだいなど(1999)『アルコールリズム』, 朝日新聞社
- バンデューラ A. (1979)『社会的学習理論』(原野広太郎 監訳), 金子書房
- 眞崎睦子 編 (2013)『お酒を手にした未成年のあなたへ—断酒会会員と家族らからの手紙』, 中西出版
- 眞崎睦子(2007)「北大生101人と飲酒」, 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第103号
- 眞崎睦子(2013)「なぜ大学生の飲酒死亡事故はなくなるのか—日本の大学における「静かな強要」と飲酒関連問題対策—」, 『メディア・コミュニケーション研究』65号

注

- 自助組織の定義は様々であるが、本稿で述べる自助組織とは「1.自助組織とは何か」で後述するように、「対等な関係のもとのコミュニケーションにより、問題の解決あるいは緩和をはかる団体」としたい。
- 一般に、多くの断酒会が、自らの組織を「医療モデル」としてとらえる。例えば、NPO法人東京断酒新生会は、そのホームページ内で、断酒例会を「例会とは会員一人一人が酒害体験と自分自身を率直に語り聴く会

です」とし、これにより「疾患の自覚と治療の意思を持つことができる」としている。

- 3 AAの日本ゼネラルサービスオフィス(JSO)の公式ホームページでは、「アルコールリクス・アノニマス(無名のアルコール依存症者たち)」と紹介されている。
- 4 <http://www.AAjapan.org/> (AA公式ホームページ)より。
- 5 (資料2)の「AA12のステップ」及び(資料3)の「AA12の伝統」については、転載はせず、筆者略言を記載した。完全文(日本語訳)についてはAA of Japan公式ホームページで確認されたい(<http://www.AAjapan.org>)。
- 6 公益社団法人全日本断酒連盟ホームページ「断酒会のしくみと現状」より
<http://www.dansyu-renmei.or.jp/mobile/aboutus.html> (2013年9月28日 最終アクセス)
- 7 2013年11月の筆者の調査先では献金を集める容器として竹で編んだザルや木製のサラダボールが用いられていた(アメリカ, ワシントン州シアトル)。
- 8 本稿では年号を西暦で表記するが、断酒会の設立に関しては合わせて和暦(元号)も記す。
- 9 本稿では1963年(昭和38年)11月の全日本断酒連盟結成大会を日本の断酒会の設立年とした。これに先立ち、日本各地に様々な禁酒活動、断酒活動が存在したことは言うまでもない。例えば、2013年、全日本断酒連盟が50周年を迎えることに対して、東京断酒新生会は60周年を迎えた。またこのような断酒活動の土台固めをしたといわれている高知県の松村春繁(初代全日本断酒連盟会長)と下司孝磨(アルコール依存治療の先駆者、医師)らの試行錯誤の年月も忘れてはならない。しかし、AAのスタイルを踏襲する形で、日本型の自助組織としての断酒活動を全国的なネットワークへと広げたのはこの年からといっていいだろう。
- 10 眞崎睦子 編(2013)『お酒を手にした未成年のあなたへ断酒会会員と家族からの手紙』, 中西出版で詳述した。
- 11 これに対して北米のAAミーティングは教会や病院で開かれることが多く、ミーティングの時間は教会であれば礼拝の前後、病院であれば、診療時間内となるなど様々である。
- 12 「韓国の年間自殺者数, 10年間で2.4倍に」(キム・ミンチョル記者, 朝鮮日報/朝鮮日報日本語版)(http://www.chosunonline.com/site/data/html_dir/2012/02/18/2012021800545.html 2012年2月18日アクセス)
- 13 2013年11月に沖縄県で開催された第50回全国大会には『琉球新報』(2013年11月18日)によると全国各地から約2150名が参加した。
- 14 但し、断酒会の正確な会員数を把握するのは困難である。会員ではないが、しばらく見学するものなどの存在を考慮すると1万人を超えているのではないかと、とは筆者の推測である。
- 15 例外的な取り組みの例の一つを紹介しておく。例えば、大分県警察本部交通部企画課では、一般社団法人大分県断酒連合会との連携のもと、飲酒運転根絶活動を行っている。また、このような連携から飲酒運転検挙者に「断酒会」の紹介をするなど、一歩踏み込んだ対策を講じている。渡邊憲一(2011)「大分県における飲酒運転根絶対策の推進について—最近、飲酒運転で検挙された100人に対する調査結果」(道路交通研究会編『月間交通』2011年8月号, 東京法令出版)に詳しい。

On the Establishment of *Danshukai*, a Japanese Self-Help Group for Alcoholics

Mutsuko MASAKI

Key Words

Danshukai, self-help group, social group, Alcoholics Anonymous, social learning

Abstract

Alcoholics Anonymous (AA) is well established in the United States and Europe. Organized and managed independently by its members, AA is a self-help, mutual-aid organization for anyone who wishes to stop drinking. AA was founded in the United States in 1935 by two alcoholics. As its name suggests, the members remain anonymous, particularly to public media. Using AA's program and traditions as a reference, several spinoff self-help groups for alcoholics and their family members have been established in different communities, with each of them having been developed according to their respective social systems. *Danshukai* is Japan's version of AA, but its definitive distinction is that it deliberately abandoned anonymity. As a policy, every member provides his/her name during activities that are designed to raise awareness. Using data, this study traces the establishment of *Danshukai*, and examines its role in Japanese society.